

Title	会話体の文体的特徴
Author(s)	舟阪, 晃
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.19-p.30
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80348
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

会 話 体 の 文 体 的 特 徴

舟 阪 晃

Stylistic Characteristics of Conversational Utterance

Akira Funasaka

Aim :

The [aim of this paper is to investigate stylistic characteristics of conversational utterance as compared with the style of novels and that of journalistic articles which were studied in my “Structural Stylistics — Data Analysis”.

Method of Analysis :

The detail of the method of analysis is available in my “Deep Structure of English”.

Data :

12,000-word-long conversational sentences: 3,000 words each out of the following four works.

- (1) Maugham, W. Somerset, *The Moon and Sixpence* (1919)
- (2) Lawrence, D. H., *Lady Chatterley's Lover* (1928)
- (3) Hemingway, Ernest, *A Farewell to Arms* (1929)
- (4) O'Neill, Eugene, *Ah, Wilderness!* (1933)

Results :

- (1) We discovered some stylistic characteristics of conversational utterance.
- (2) We revealed some difference of the styles among novels, journalistic articles and conversational utterance.
- (3) We made partial reference to the style of English in general.

1. 目 的

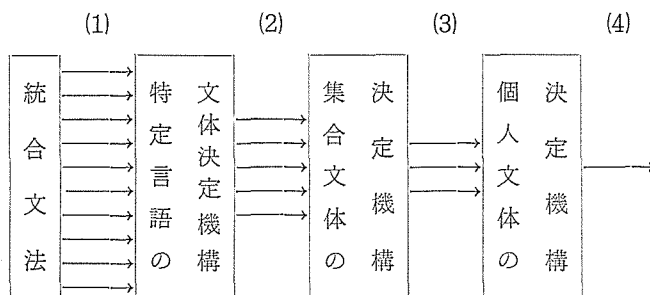
この小論の目的は、「構造的文体論——資料分析」¹⁾で扱った「小説の文体」と「社説文の文体」と比較しながら、会話体の文体の特徴を調べてみることである。

1) 大阪外国語大学学報 vol. 20(1969)

2. 文体決定の機構

文体決定の機構については、「構造的文体論への予備的考察」¹⁾ですでに検討し、「個人文体」と「集合文体」とを決定する機構を考えた。しかし、これまでの資料調査を通して、この二つの文体のほかに「言語の文体」が区別できることに気がついた。したがって、ここでは、文体決定機構の中に三段階の選択機構を考えることにする。

下図を参照されたい。統合文法²⁾の出力(1)は特定言語の文法的な文のすべてである。どのよう



な文でも、その言語の *native speakers* によって理解される限り、(1)の中に含まれていなければならない。この文法的な文は「特定言語の文体決定機構」により第一次の選択をうけ、その出力(2)として、特定言語でふつうにうけいられる (*acceptable*) 文のみが選ばされる。「ふつうに」というのはあいまいな表現であるが、*native speakers* に理解されうる文と「ふつうに」受けいられる文とは区別されるべきであろう。たとえば、英語の場合、文のはめこみ操作 (*sentence embedding*) を何十回とうけたような文は、理解されうる文ではあっても、ふつうに用いられる文ではないであろう。Chomsky の例³⁾ をかりれば、

(i) I called the man who wrote the book that you told me about up.

(ii) The man who the boy who the students recognized pointed out is a friend of mine.

などは、文法的ではあるが、ふつうに用いられる文ではないということになる。

上図の(2)の部分で「特定言語の文体」とよぶことにする。

特定言語でふつうに用いられる文は「集合文体の決定機構」で第二次の選択をうけ、その結果、小説の文体、新聞の文体、会話体の文体、などの集合文体(3)を形成する。さらに、集合文体は「個人文体の決定機構」で第三次の選択をうけ、最終的に、個人文体(4)を形成する。

この経路を逆にさかのぼれば、たとえば、Hemingway の *A Farewell to Arms* は Hemingway 個人の文体的特徴をもっており、小説としての集合文体的特徴をもち、さらに、英語としてふつうの文体的特徴をもち、最後に、英語として文法的な文からなっている、といえる。換言すれば、彼が作品を書くときには、意識的にしろ無意識的にしろ、Hemingway 的な表現を選択

1) 大阪外国語大学学報 vol. 19(1968)

2) 統合文法の内部構造については、拙稿「集合文体」について(英米研究 6 (1968))で簡単に言及した。

3) Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax* (1965) P. 11.

したであろうし、その表現は小説にふさわしい表現の中から選択されたであろう。さらに、選択の対象となった文は英語としてふつうの文、文法的な文であったはずである。

このような考え方から、われわれは、「個人文体」、「集合文体」のほかに、「特定言語の文体」を区別することにする。

3. 文体分析の方法

分析の方法については、「英語の深層構造」¹⁾で詳述したのでここでは省略する。

ただし、分析の対象を形態素配列論の一部に限定することはふたたびおことわりしておく。

4. 分析資料

小説の文体と社説の文体の資料は、「構造的文体論——資料分析」で扱ったものである。会話体の文体資料は下記の四つの作品の会話体の部分のみ、12,000語の長さの部分である。

- (1) Maugham, W. Somerset, *The Moon and Sixpence* (1919)
- (2) Lawrence, D. H., *Lady Chatterley's Lover* (1928)
- (3) Hemingway, Ernest, *A Farewell to Arms* (1929)
- (4) O' Neille, Eugene, *Ah, Wilderness!* (1933)

5. 分析結果

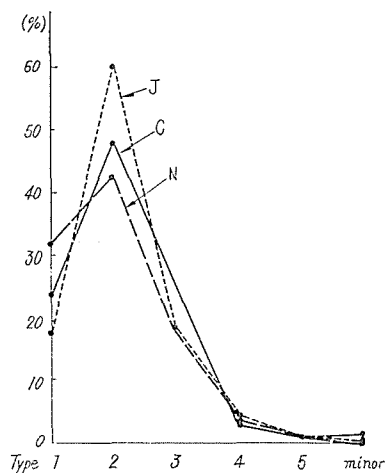
5.1. 構造型²⁾の分布(第1表, 第1図)

小説をN, 社説をJ, 会話体をCとする。

小説(N)と社説(J)の間には差が認められるが、会話体(C)と小説(N), 会話体(C)と社説(J)の間の差は大きくない。CはNとJとの中間的特徴を示している。

	N	J	C
Type 1 NP+VI	32.6 ^(%)	17.9	23.5
Type 2 NP+VT+NP	43.0	61.1	48.3
Type 3 NP+VB+C	18.5	18.7	25.1
Type 4 NP+VC+NP+C	4.0	4.3	3.0
Type 5 NP+VD+PNP	0.3	0.6	0.2
minor	0.1	0	1.0

第1表



第1図

1) 大阪外国語大学学報 vol. 18 (1968)

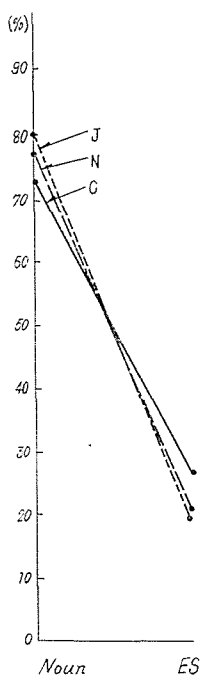
2) 詳しくは拙稿「英語の深層構造」

N, J, C, 三者とも, Type 2 が多く用いられるが, その順位は J (61.0%), C (48.3%), N (43.0%) であり, Type 1 における順位は N (32.6%), C (23.5%), J (17.9%) である。したがって, Type 1 と Type 2 の分布は反比例的特徴を示している。

Type 3 に関しては, 三者とも大きな差はないが, Cで比較的多く用いられる。NとJとの差はほとんどない (0.2%)。

英語の文体としての特徴は Type 2 が多く用いられることである。Type 1, Type 3 が Type 2 につづいている。

5.2. Type 2 の目的語の位置にくる Noun/ES の分布 (第2表・第2図)



第 2 図

	N	J	C
that S	34.1	50.6	4.6
con-S	6.4	1.1	6.4
Sto	30.7	26.5	28.5
Sing	9.4	6.1	4.4
S	0.4	9.9	46.6
others	13.8	6.7	10.7

第 3 表

	N	J	C
Noun	78.1	80.9	73.4
ES	21.4	19.4	26.6

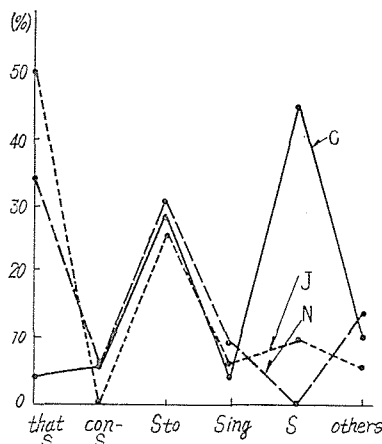
第 2 表

Noun は名詞のほかに代名詞を含む。ES ははめこみ文 (embedded sentence) で, その詳細は5.3を参照されたい。

N, J, Cの間の差はないと認められる。Noun/ES の分布は集合文体によって影響をうけない。

5.3. Type 2 の目的語の位置にくるESの下位分類 (第3表・第3図)

that S は that のあとに文がはめこまれたもので, that が消去されたものがSである。con-SはSの前に that (ϕ を含む) 以外の接続詞があらわれる



第 3 図

もので, if S, why S, when S などである。Sto は不定詞句への文はめこみ, Sing は動名詞句への文はめこみである。

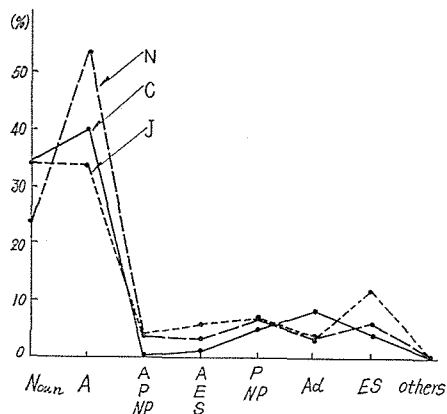
that S と S とにおいて, N—J と C との間には大きな差があるが, N と J との差は大きくない。that S と S との分布は反比例的特徴を示し, that S が多用される文体では S がすくなく, that S がすくない文体では S が多くなる。したがって, that S と S との分布差は集合文体区別の一つの基準になる。C にだけついていえば, that S の分布は極度に少なく (4.6%), S の分布は多い (46.6%)。

con-S, Sto, Sing, others の中では Sto が多用されるが, 四者の分布は安定している。

5.4. Type 3 の Complement の下位分類の分布 (第4表・第4図)

	N	J	C
Noun	24.0	34.0	34.8
A	53.4	34.2	40.0
APNP	2.9	3.6	0.6
AES	3.1	6.0	1.8
PNP	6.9	6.5	5.5
Ad	3.7	3.9	7.9
ES	5.9	12.0	3.8
others	0.6	0.3	0

第4表



第4図

J と C との差は小さいが, J と N との差は大きい。この特徴は 5.1 構造型の分布でみられたものと同じである。

英語の文体としては, Complement に A, Noun がくるのがもっともふつうである。

N の特徴は A が圧倒的に多く, A と Noun との間の差が大きいことである。C と J においては, Noun と A との間の差は小さく, J ではその差は 0.2% あるだけである。

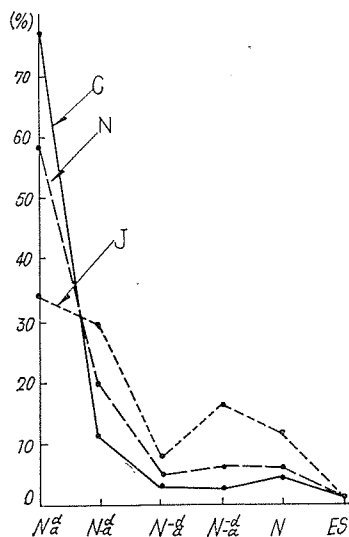
5.5. 主語の位置 (全構造型) にくる Noun の下位分類の分布 (第5表・第5図)

N_a^d は definite, animate noun, N_{-a}^d は indefinite, inanimate noun である。

C と N との差は小さいが, C—N と J との差は大きい。C, N では N_a^d が極端に多く (77.0%, 58.7%) 用いられ, 他はあまり用いられない。J においては, N_a^d , N_{-a}^d がともに多用され, N_{-a}^d がそれにつづいている。 N_a^d と N_{-a}^d との差が小さい点が, C, N と区別される大きな特徴である。

N_a^d , N_{-a}^d の分布は集合文体区別に役立つ因子である。

英語の文体のレベルでは N_a^d の多用が一つの特徴である。

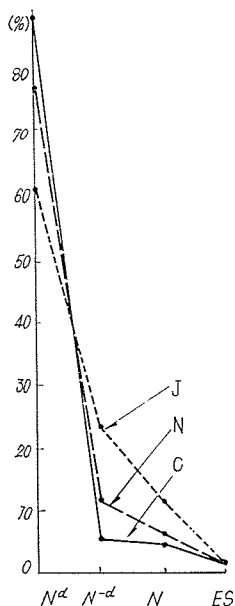


第 5 図

	N	J	C
N_a^d	58.7	34.6	77.0
N_{-a}^d	19.8	28.3	11.4
N_a^{-d}	4.7	7.4	3.0
N_{-a}^{-d}	6.3	16.2	2.7
N	6.2	11.8	4.9
ES	1.5	1.5	1.4

第 5 表

5.6. 主語の位置（全構造型）にくる N^d/N^{-d} の分布（第 6 表・第 6 図）



第 6 図

	N	J	C
N^d	78.6	62.9	88.4
N^{-d}	11.2	23.7	5.7
N	6.2	11.8	4.9
ES	1.5	1.5	1.4

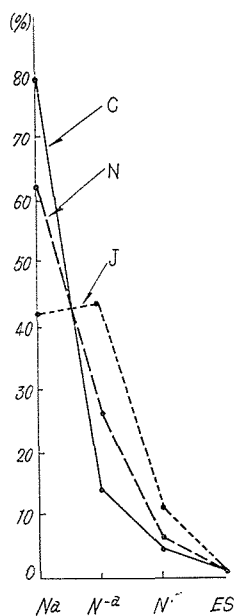
第 6 表

NとCとの差は小さく、N—CとJとの差はあるが、5.5でみられる程の差はない。N—Cの特徴は N^d が圧倒的に多く用いられ、 N^d と N^{-d} との差が大きいことである。 N^d 、 N^{-d} の分布は集合文体区別の因子となる。

5.7. 主語の位置（全構造型）にくる N^a/N^{-a} の分布（第 7 表・第 7 図）

	N	J	C
N_a	63.5	42.0	80.0
N_{-a}	26.2	44.5	14.1
N	6.2	11.8	4.9
ES	1.5	1.5	1.4

第 7 表



第 7 図

CとNとの差は小さいが、C—NとJとの差は大きい。この特徴は5.5のグラフに類似している。

C—NではN^aが圧倒的に多用されるが、JではN^{-a}の方が、N^aよりわずかながら多く用いられる。

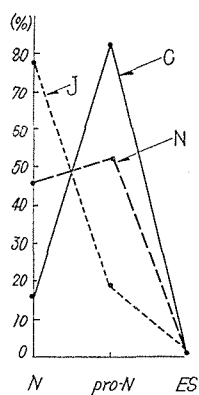
N^aはCでもっとも多く用いられ、N^{-a}はもっとも少なく用いられる。

この分布は集合文体区別の因子になりうる。

5.8. 主語の位置（全構造型）にくる Noun/pro-N の分布（第8表・第8図）

N, J, Cの間の差は非常に大きい。NではNounとpro-Nとの差は小さく、pro-Nの方がやや多く用いられる。一方、JとCでは、Nounとpro-Nとの差は大きい、JではNounが、Cではpro-Nが圧倒的に多く用いられる。

この分布は集合文体区別に役立つ特徴を示している。



第 8 図

	N	J	C
N	46.2	78.7	16.5
pro-N	52.5	19.6	82.9
ES	1.5	1.6	1.4

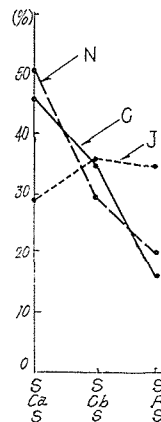
第 8 表

5.9. SCaS, SCbS, SRS の分布（第9表・第9図）

SCaS は *and, but* などによる、SCbS は *if, when* などによる、SRS は関係詞による文連結（sentence conjoining）

	N	J	C
SCaS	50.6	28.7	46.5
SCbS	28.8	36.2	35.4
SRS	20.6	34.4	15.9

第 9 表



第 9 図

である。

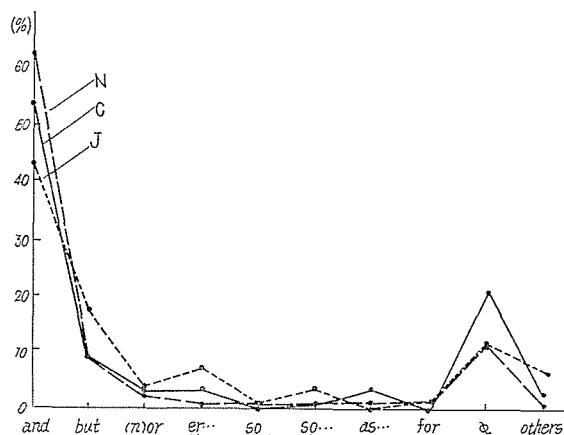
NとCとの間の差は小さいが、N—CとJとの差は大きい。N、Cにおいては、Ca, Cb, Rの順位で多用される。Jにおいては、Ca, Cb, Rの間の差は小さい。多く用いられる順位はCb, R, Caである。

5.10. Caの下位分類の分布（第10表・第10図）

第10表・第10図における記号でCaがℳというの、文がコンマ、ダッシュ、コロンなどで連結されている場合である。

N, J, Cの間の差はほとんどない。もっとも多く用いられるCaは *and*, *but*, ℳである。*and*の多用順はN, C, Jである。Cで*and*が多用されると予想されたがNの方が多かった。これは、Cでは、*and*のほかにℳが多用され、さらに、短い独立文（文連結操作をうけていない）が数多く用いられるためである。

Ca	N	J	C
and	63.6	43.0	54.2
but	9.2	17.4	9.6
(n)or	2.3	4.4	3.6
er...than	1.3	7.7	3.8
so that	1.1	0.3	0
so... that	0.7	3.1	1.4
as...as	0.9	0	3.6
for	0.9	1.0	0.3
ℳ	16.6	17.0	20.1
others	1.1	6.1	2.8



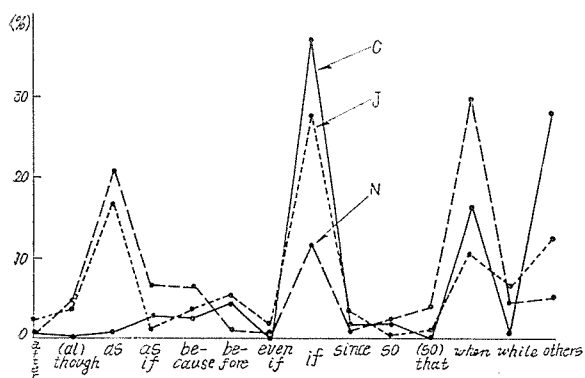
第 10 図

第 10 表

5.11. Cbの下位分類の分布（第11表・第11図）

Cb	N	J	C	Cb	N	J	C
after	0.2	2.2	0.4	if	11.7	28.0	37.2
(al)though	4.0	3.7	0	since	1.5	3.2	1.8
as	20.9	16.8	1.0	so	2.9	0.8	2.0
as if	7.2	1.3	2.9	(so)that	3.8	1.4	0
because	6.7	3.6	2.6	when	30.0	10.9	16.6
before	1.8	5.1	4.4	while	4.7	7.6	0.8
even if	0.6	1.7	0	others	4.9	12.6	27.8

第 11 表



第 11 図

N, J, Cの間の差は項目により変動する。*as*に関していえば、NとJとの差は小さく、N—JとCとの差は大きい。一方、*if(unless)*に関していえば、CとJとの差は小さいが、C—JとNとの差は大きい。

Nで多く用いられる Cb の順位は *when, as, if* で、Jで多く用いられる順位は *if, as, when* で、Cでは *if, others, when* である。

N, J, Cを通じて多く用いられるのは *if, when* で、これは英語使用の特徴の一つである。

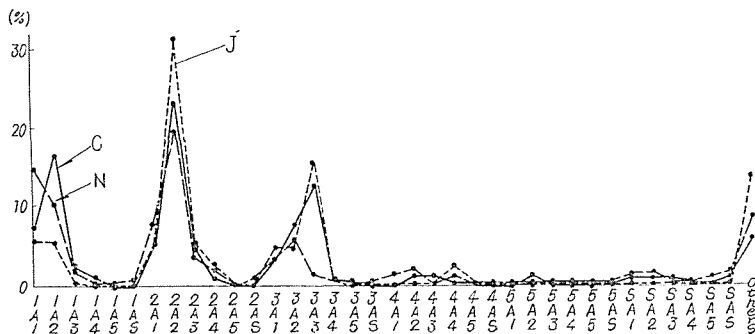
また、N, Jで多く用いられる *as* が、Cでは1.0%であるというのも注目すべき事実である。

5.12. and 連結の分布 (第12表・第12図)

	N	J	C		N	J	C
1 A 1	14.8	5.8	7.3	4 A 2	2.0	0	1.4
1 A 2	10.4	5.2	16.6	4 A 3	0	0.8	1.0
1 A 3	2.2	0.7	2.4	4 A 4	0.9	2.1	0.6
1 A 4	0.7	0	1.2	4 A 5	0	0	0
1 A 5	0.2	0	0	4 A S	0	0	0
1 A S	1.1	0	0	5 A 1	0	0	0
2 A 1	7.6	5.8	5.7	5 A 2	0	0	0.8
2 A 2	19.3	31.6	22.9	5 A 3	0	0	0
2 A 3	3.5	5.3	4.0	5 A 4	0	0	0
2 A 4	1.8	2.1	1.2	5 A 5	0	0	0
2 A 5	0	0	0	5 A S	0	0	0
2 A S	1.0	0	0	S A S	1.7	0	0.6
3 A 1	3.4	4.6	3.2	S A 1	1.6	0	0.6
3 A 2	5.7	5.1	7.2	S A 2	1.4	0	0.6
3 A 3	1.7	14.9	12.8	S A 3	0	0	0.5
3 A 4	0.5	0	0.6	S A 4	0.1	0	0
3 A 5	0	0	0	S A 5	0	0	0
3 A S	0.2	0	0.5	others	7.7	13.3	5.3
4 A 1	1.1	0	0.5				

第 12 表

第12表・第12図の記号について。Aは連結詞 *and*, Aの両端は連結されている構造型の番号である。したがって1 A 2は Type 1 と Type 2 とが *and* により連結されている場合である。また, 2 A Sは *and* の前の構造型は Type 2 であるが, *and* の後はいくつかの Types がすでに連結されていることを示している。(e. g. 2 *and* (1 *and* 3))。最後に, othersは, S₁, S₂, S₃ and S₄ のような連結例である。



第 12 図

N, J, Cの間の差の有無はこのデータでは判定できない。1 A 2と2 A 2とにおいてはCとNとの差は小さく, C—NとJとの差が大きい。しかし, 3 A 3においてはJとCとの差が小さく, J—CとNとの差が大きい。

集合文体をはなれて, 英語の文体という観点から見れば, 多く用いられる組み合わせは, 1 A 1, 1 A 2, 2 A 1, 2 A 2, 2 A 3, 3 A 2, 3 A 3, others などである。そのなかでとくに多く用いられるのは2 A 2である。このことは, 一般的にいて, 構造型の Type 2 が多く用いられる (5.1) という事と, 二つの構造型が *and* で連結される場合, 同じ構造型が *and* の両端にあらわれることが多いということとによっている。したがって, 1 A 1 や 3 A 3 も比較的多く用いられることになる。

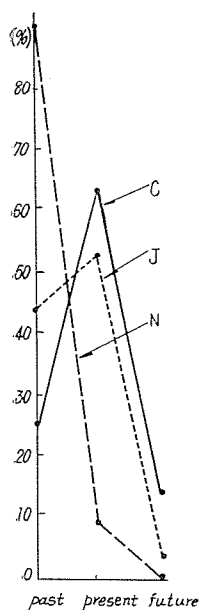
最後に注意すべきことは, 1 A 3, 1 A 4, 1 A 5, 1 A S, 2 A 5, 2 A S, 3 A 4 から S A Sなどはほとんど用いられていないということである。

5.13. 時制の分布 (第13表・第13図)

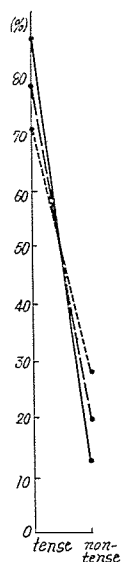
	N	J	C
past	90.4	43.3	23.0
present	8.9	52.2	63.6
future	0.5	3.0	13.6

第 13 表

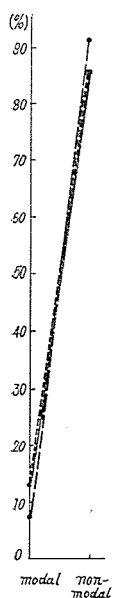
C—Jに対して, Nが特異な分布を示している。つまり, Nではpastが圧倒的に多く (90.4%), C—Jでは past, present とともにあらわれ, presentの方がpastよりも多い。futureに関していえば, 例の絶対数が少ないので特徴的なことはつかめないが, Cにおいて一番多く用いられるといえる。



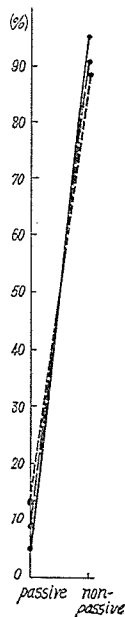
第 13 図



第 14 図



第 15 図



第 16 図

5.14. 時制/非時制の分布 (第14表・第14図)

	N	J	C
tense	79.0	71.9	87.4
non-tense	20.4	28.1	12.6

第 14 表

時制というのは動詞の定形を意味し、非時制は分詞、動名詞など、定形をなしていないものをさしている。

N, J, Cの間の差はないといってよい。つまり、時制/非時制の分布は集合文体の変化による影響をほとんどうけない。

5.15. modal/non-modal の分布 (第15表・第15図)

	N	J	C
modal	7.7	13.8	13.0
non-modal	91.9	86.2	86.9

第 15 表

modal は *can*, *must*, *be to* などである。

N, J, Cの間の分布のばらつきは5.14におけるそれよりも小さい。

この分布は集合文体のちがいによる影響をほとんどうけない。

5.16. 受動態/非受動態の分布 (第16表・第16図)

	N	J	C
passive	8.5	11.6	4.9
non-passive	91.5	88.4	95.0

第 16 表

非受動態は Type 2 と Type 4 で受動変形をうけていないものである。もともと受動態になりえない Type 1 や Type 3 は含まれていない。

N, J, Cの間の差はないといえる。さらに、三者の分布の間のばらつきは小さい。

したがって、5.14, 5.15, 5.16は集合文体区別に役立たない項目である。

6. ま と め

以上の調査結果をまとめてみよう。第17表の縦欄は対象としている資料で、N↔Jは「NとJとを比較した場合」ということである。横欄はこれまでの調査項目である。表中の+は資料間に差があること、-は差がないこと、±はどちらとも判定できないことを、それぞれ、示している。

	(1) Types	(2) Noun/ES	(3) E S の 下位分類	(4) 補 語 の 下位分類	(5) Noun の 下位分類	(6) Nd/N-d	(7) Na/N-a	(8) Noun/ pro-N
N ↔ J	+	-	±	+	+	+	+	+
J ↔ C	±	-	+	±	+	+	+	+
C ↔ N	±	-	+	+	±	-	±	+

(9) Ca/Cb/R	(10) Ca の 下位分類	(11) Cb の 下位分類	(12) and 連 結	(13) 時 制	(14) 時制/ 非時制	(15) modal/ non-modal	(16) 受動/ 非受動
+	+	±	±	+	-	-	-
+	±	±	±	+	-	-	-
±	±	+	±	+	-	-	-

第 17 表

第17表において、+の場合には、その項目は集合文体区別に役立つものである。- の 場 合 に は、その項目は集合文体のちがいににより影響をうけないものである。したがって、小説でも、社説でも、会話体でも安定した分布を示している。(1969年1月8日)

Bibliography

Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax* (MIT) 1965.

Data

Hemingway, Ernest, *A Farewell to Arms* (Penguin Books) 1962.

Lawrence, D.H., *Lady Chatterley's Lover* (Penguin Books) 1961.

Maugham, W. Somerset, *The Moon and Sixpence* (Penguin Books) 1967.

O' Neill, Eugene, *Ah, Wilderness!* (Penguin Plays) 1960.